



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ社会民主党リーダーの状況認識と戦術（２）－カール・カウツキーの場合（その１）１８９０～１９００－
Author(s)	山本, 左門; YAMAMOTO, Samon
Citation	北大法学論集, 19(3), 152-174
Issue Date	1969-03-15
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/16112
Type	departmental bulletin paper
File Information	19(3)_p152-174.pdf



研究ノート

ドイツ社会民主党リーダーの状況認識と戦術(二)

——カール・カウツキーの場合(その一) 一八九〇年～一九〇〇年——

山本佐門

はじめに

第一章 エルフエルト綱領とカウツキー

第二章 「ユンゲン」、「フォルマル」の主張をめぐる論争

第三章 「農業論争」とカウツキー

第四章 プロシヤ邦議会选择参加をめぐる(以上十九卷二号)

第五章 ベルンシュタインの「提案」をめぐる論争

第一節 ベルンシュタインの提案

第二節 カウツキーの対応

第三節 ローザ・ルクセンブルグの対応

第六章 まとめ(以上本号)

第五章 ベルンシュタインの「提案」

をめぐる論争

第一節 ベルンシュタインの提案

ベルンシュタインの諸々の「社会主義」及び「その運動」に関する見解がとくにSPDのリーダー内部で問題にされてきたのは、九〇年代末であった。その主張は確かに公式のマルクス主義の原則への疑問、修正という側面ももっていたけれども、より強い衝撃と反作用をSPDのリーダーにもたらしたのは、当時のSPDの戦術、戦略論を総合的かつ具体的にベルンシュタインが提出したことであった。そして本章では、ベルンシュタインの主張をこのような角度から考えてみたい。⁽¹⁾

ベルンシュタインの「提案」はまず、エルフルト綱領の原則部分の状況認識、将来への全面的な懐疑から始まる。エルフルト綱領の基本認識の中には「社会の二大階級への分極、それらの対立の激化及び経済混乱(大恐慌に収斂する)による政治的カタストロフエ(決定的破局)の不可避」が想定されているとし、SPDの正統「変革理論」もこれを前提としていると考える。しかしこ

の認識は事実として妥当していないこと、いかえれば「分極化」はすまず、「対立も激化」しない。「大恐慌」もさけられるようになってきた。そして今みられる政治状況を、「すべての先進国においては資本家的ブルジョアジの特権が一步一歩民主主義的制度に譲歩しつつあるのを見る。この民主主義制度の影響の下で、また益々つよまってくる労働運動によって、資本の搾取的傾向への社会的反動が生じた。なるほど今日それはかなり控え目で手さぐりであるけれども、存在しており、次第に経済生活の領域にその影響力をくいこませている。工場法、自治体の民主化、その活動領域の拡大、労働組合や協同組合があらゆる法的障害から解放されること、公共団体によって行われるあらゆる活動に際して労働者組織が考慮されるということ、(これらは)発展の現段階を特色づける」ととらえる。さらに「ドイツにおいて労働組合を抑制できるということは、ドイツの政治的発達の高さではなく低さを物語る」ものであって、「進歩」してゆけば「民主主義」は一層すすみ、政治的カタストロフエの可能性も益々少なくなってくる。このような時「カタストロフエ」を想定し、それを指針とするのは空語もはなはだしいと考える。さらにこの変革を遂行するプロレタリアートを観察すれば、たしかに全人口の絶対多

数であるが、各々の「労働条件」「生活条件」「政治意識」の面できわめて多様であるとし、ベルンシュタインの目からみれば、今日の「プロレタリアート」は「一七八九年の『人民』よりもなお一層相ことなつた社会層の合成物」なのであつて、ある状態においては対立しあうこともあるのであり、この階級に「樂觀的で單純な評價」は与ええないのである。さらにプロレタリアートを単に「工業労働者」に限定したとしても、その数はドイツでは少数(7001900)万でありそれらの多くは社会主義をもとめてはいないし、SPDの支持者でもない⁽⁶⁾とみなす。かくして近い将来「社会主義」革命を想定しうる根拠は、客觀的状态を考へても、また運動主体を考へても、存在しないことになる。従つて、エルフルト綱領の第一部分是SPDの「道しるべ」としてきわめて不適切となり、彼によつて新たな「道しるべ」が提示されることになる。当然にその道は当面の民主主義と社会改良のための活動に重点をおくものになる。「諸国民の發展途上で重要な諸時期はとびこえうるものではない」から、「社会民主党の当面の諸任務に、すなわち労働者の政治的權利のための闘争、それらの階級利益のために行われる都市及び地方自治体での政治活動ならびに労働者の経済的組織の事業に、最大の価値をおく⁽⁷⁾」ということになり、

「窮極目標」との関連では、「労働者階級が描きあげられた一つの最終目標を設定しているかいないかは、彼らが当面の諸目標を精神的に追求するかぎり、結局副次的なものである。重要なのは経済及び全社会生活の一層高度な段階を表わす一定の原理によつて、彼等の諸目標が充たされていること、そして文化の發展で一つの進歩を、すなわちより高度な道徳と法的觀念とを表わす社会的觀念によつて、彼等の諸目標がつらぬかれていること⁽⁸⁾」となり確かに「窮極目標」はあるのだが、それは抽象的な「理念」であり、「当面の諸任務」の遂行の中にも体现されるものである。それゆへ、この理念は現在の否定から実現する「理念」でなく、現存する「理念」を一層拡大してゆくものであつた。したがつて先にあげた「当面の諸任務」を増進してゆくプロセスこそ、「社会主義」の進展なのであつた。それはまた「民主主義」を深めてゆくことであり、民主主義の發展した社会である「市民社会」(Bürgerliche Gesellschaft)を「一般化」するプロセスでもあつた⁽⁹⁾。彼の考へる「社会主義社会」は現社会の延長線上に「徐々に」できあがつてくるものなのである。

このような基本的方向がエルフルト綱領の第一部分にかわつて置かれるのであり、この「新道しるべ」からみるならば「綱領」

の第二部分はむしろ第一部分とは逆にきわめて重要な、いな「綱領」の「核」たる位置が与えられる。それゆえこれに対しては基本的には何んら「異論」はなかったが、綱領成立後のSPD及びそれをとりまく状況からみて、特に「考慮」「再考慮」の必要ないくつかの当面の政策に検討を加えている。ここでは、それらの特徴点だけを指摘しておく。まず「国防問題、外交政策、植民地問題」についていえば、SPDが国内でかなり政治的勢力を拡大し、「プロレタリアートが国家上での権利者になった」ことから、それらは「国家的利益・義務」に無関心たりえなくなつたし、またそうあるべきではないと考え、SPDが政府の行う「国防・外交・植民地政策」を全面的に否定することに反対するのであり、「一兵・一グロスもこの国家に与えない」というSPDの原則の否定でもあつた。⁽¹⁾第二は農業問題であり、ベルンシュタインは、農民の動向は各政治勢力の力関係に大きな影響をもつもので、農民をSPDに長期にわたってひきつけるには、「すぐ近い将来に彼等に改善の見通しを与え、また彼等に直接的に便宜をもたらす諸方策のために尽力する」必要があるとし、SPDが二つの前提の下で、「農民保護」を「所有者としての農民保護」にならざることを恐れずになしうるとする。第一には、「農民保護となら

んで強力な農村労働者保護がある」こと、第二には、「民主主義が国家や自治体で優勢であること」をあげる。そして興味深いことに、この「二つの前提」についても、さらに彼の考える当面の「農業政策」についても、カウツキーの九八年に公表された「農業政策」との共通性を、ベルンシュタインは強調するのである。事実両者の当面する「農村政策」とその意味づけは、共通性もつていたのである。⁽²⁾第三点は、第二点とも関連するが自治体政策である。彼にとつては、「自治体の民主化」すなわちそこで住民（プロレタリアートも含む）の諸権利・諸要求を実現してゆくことは「社会主義化」の貴重なプロセスである。このためにはまずドイツでは「選挙権の民主化」がもつともすすめられねばならぬとしている（ドイツの自治体の $\frac{3}{4}$ が不平等選挙権）。第四点は、協同組合政策で、とくに労働者の消費協同組合運動を妨げる法律上の障害をのぞき、さらにこの運動を促進する役割をもつように行政機関を改革することが考えられている。そして彼にいわせれば、この四つの点はいずれも党にとつて「言葉」の上では否定されているかもしれないが、事実上行われているものなのであり、「もしも社会民主党が実際に古くなっている言葉使いから自己を解放して、こんにち実際にあるがままの姿を、すなわち民主

的・社会主義的改良政党たることを人前にさらそうという勇氣をもつようになれば、社会民主党の影響はこんにちよりもずつと大きくなるであろう⁽¹⁴⁾というのである。ベルンシュタインの戦術論の提起は、SPDの實際活動の広まりと深まりを新たに「理論づけ」したことであり、他面からいえば、「理論（SPDの公式のドグマ）と実践」のずれを「理論」を修正することによってうめようとする試みであったといえる。それは具体的にいいなおせば、エルフルト綱領の第一部分を否定し（修正ではない）、新しい「状態分析」と「倫理目標」を代置し「エルフルト綱領の第二部分」を徹底させようという試みであった。そしてこの場合、最終目標と当面目標は、「分離」もしくは「段階化」はされえなくなつた。

第二節 カウツキーの対応

このような「エルフルト綱領の原則」つまりSPDの公式「道しるべ」への「否定」に対して、カウツキーは強く反対し、綱領の正しさを示そうとした。ここでは、カウツキーがベルンシュタインの「新提案」に対し、いかなる対案でもつてのぞんだかを考えてみる⁽¹⁵⁾。

彼からみれば、「綱領」の基本認識は「小経営の没落」と「人

民の窮乏の増加」「恐慌の発生」「階級対立の激化」であり、このいずれもが彼の解釈からすれば妥当していることになる。「経営の没落」についていえば没落の「遅速」ではなく、その「傾向」が問題であり、「傾向」としてみれば、「没落」はすすんでいることになる。さらに重要なことは、経営規模を単に「数」の上からとらえるのではなく、全産業の中でとらえられねばならず、その結果、工業の中で経営の集中がもつともみられ、しかも全産業の中で工業の比重がきわめて高まっております、他産業はこれに従属し、とくにそれらの中・小経営は犠牲をしいられる⁽¹⁶⁾。さらに「人民の窮乏の増加」も、単に「所得」の増加だけでは全く判断できないとする。以下の文章が彼が主張する「窮乏化」の内容をきわめて簡潔にあらわしている。

「資本主義的生産方法が高度の発達をとげている産業部門や地方では主にプロレタリアートの力による生理的窮乏への抵抗によって徐々に低下傾向を克服できるが、社会的窮乏は、そこでもまた、労働を単調かつ不快ならしめるところの分業及び機械制度の発達によって、また婦人労働、しばしば熟練労働の駆逐でもある幼年労働の拡張によって、さらに生活不安の増加によって、またプロレタリアの生活標準が同時代のブルジョアの生活標準の向上

から取り残されることによって、進行する。特に選び出された、幸運に恵まれた労働者の層は、恐らく、この窮乏化の段階を克服し、且つブルジョアの標準から見ても貧窮とは云われないような生活標準まで向上することができるとも思えない。しかしながら、彼等にとつてもまた、全資本主義機構を支配している窮乏化の傾向は依然として動かぬのである。彼等は絶えず恐慌や発明や工場主の同盟や、より低級な労働者層の競争によって、彼等の特権的地位から追いやられ、そして通常の階級的窮乏へ突きおとされる危険に曝されているのである。従つて資本主義的生産方法ではいたるところに窮乏があり、プロレタリアが多ければ多いほど小経営が資本によつて悪化され、あるいは下敷にされることが大きければ大きいほど、窮乏の量が益々多くなる⁽¹⁷⁾のであつて、それゆえこの「窮乏化」は資本主義社会の全機構の中でとらえられねばならず、先にのべた「小経営の没落」や「恐慌」ともきわめてつよく結びついていると考える。この「恐慌」についても、「綱領」は「すべてをのみつくす最後の恐慌」を意味しているのではなく、資本主義生産のもとでは過剰生産及びこれに基づいて生ずる「恐慌」が「不可避」でかつ「慢性化」することを意味している⁽¹⁸⁾のであり、この現象は「カルテル化」がすすんでも妨げえないとする。こうして「エルフルト綱領」の経済状況の認識は、「傾

向」として、また「資本制生産機構」全体を有機的にとらえてみるなら、依然として「妥当」するものであつた。しかしこの解釈によれば、経済状況から「一般的・不可避的傾向」「慢性的現象」がひき出されるが、「カタストロフェ」(決定的破局)の到来は直接には考えられなくなる。この点は、ベルンシュタインも否定した通りである。それでは、この経済上の「慢性的矛盾」をつきくずし除去する作用は、どこから出てくるのか。カウツキーは、プロレタリアートの「成長」による「階級闘争」の激化と勝利にもとめる。資本主義的生産様式は上にのべた「窮乏の増加」「小経営の衰退」「慢性恐慌」をもたらす一方、「プロレタリアートを資本家階級に対する階級闘争に追い立て、プロレタリアートをして益々その数において、団結において、知識において、自覚において、政治的成熟度において増大せしめ、プロレタリアートの経済的 중요さを益々高め、それらの政党としての組織とその勝利を避くべからざるものとなし、そしてまたこの勝利の結果として社会主義的生産の発生を避くべからざるものとする」⁽¹⁹⁾のであつて、まさしくカウツキーにとつても、社会主義の到来は「経済上の自動崩壊」でなく、プロレタリアートという人間集団の「作業」によるものなのである。とはいえカウツキーの場合、「プロレタリアート」が成長してゆくことと、「窮乏化」「小経営の衰退」「恐慌の可能性」が

存続していることは切りはなせないであり、これらはとくに「窮乏化」に収斂されるのであり、カウツキーが解するような「窮乏化現象」こそ、労働者階級の強化の中心的要因でもあった。⁽²⁰⁾ それでは、この「社会」をつきくずす直接の主体であり、ベルンシュタインによって、利害においても、政治意識においても「きわめて雑種の」と判断された「プロレタリアート」(特にドイツ)を、カウツキーはどのようにとらえていたであろうか。

まずカウツキーの主張を列挙してみよう。

第一に工業・商業・農業の労働者の利害は同一でないことをみとめるが、しかし「これらの諸層が一つの政党となつて継続的に協力してゆくことを不可能ならしめる利害の対立」ではないことを指摘し、⁽²¹⁾ さらに「全プロレタリア層が社会主義的思想の領域や政党組織や労働組合組織の点で同じ程度に達していない」こと、「工業労働者が先頭に立ち、商業労働者及びいうまでもなく農業労働者が後陣に止まる」という状態であることは認められるが、「このことは」SPDが「任務を果たすところまでまだいっていない」ことを示すだけで、「任務が見透しうる期間内に解決できぬ」ことを示しているのではないかと考えている。⁽²²⁾

さらに、SPDにとって有利な状態が生じていることを指摘する。「経済的發展は、社会主義に一番速く接近するプロレタリア

層をもっとも多く増加せしめる」つまり「都市においては工業人口が多数をしめ、また都市が地方に比して益々優勢の地位をしめる」という状態であった。⁽²³⁾ また、工業労働者の中での利害の衝突・連帯感の欠如などという指摘も、カウツキーにとっては否定される。さらにベルンシュタインの投票分析に「反論」し、「SPDの投票数と選挙権を有する工業労働者の数とは、ほとんど合致する」とのべる。⁽²⁴⁾ カウツキーからみれば「プロレタリアート」への「高い評価」はなんら修正する必要もないのである。「プロレタリアートの政治的能力を何等の根拠もなく小さくいうことによつて闘争の最中にプロレタリアートを落たんさせることではなく、それらの政治能力に出来るだけ多くのものをもとめる」ことを強調する彼自身の言葉が、この特色をよくあらわしている。⁽²⁵⁾ 「慢性的な経済上の矛盾」がありつづけ、そしてこれを除去する「力」であるプロレタリアートの「健在」が認められた。この中で「SPD」はいかなる「目標・戦術」をかかげるべきであるのか。まずこの「慢性的矛盾」をとりのぞくこと、そして「資本制生産」がつづく限りこの矛盾が「傾向」としてのこる以上、これを新しい「制度ととりかえる」ことが必要であり、この「作業」がSPDの「最終目標」なのである。⁽²⁶⁾ それでは、ベルンシュタインがいうような「社会主義」への進化のプロセスとしての

「民主主義の進展」及び「社会改良」の強調は、いかに考えられるだろうか。

ベルンシュタインが「社会主義そのものであるし、また社会主義への手段ともなる」ものとして、また「階級支配を原理上撤廃するもの」として「民主主義」をとらえたのに対して「民主主義の進展」は「階級闘争の無用な尖鋭化をさける」ことはできるし、またそれは「プロレタリアートの階級支配に達しうる唯一の政治形態であるけれども」「階級支配の撤廃」と同一ではなく、「民主主義が進展」しても「階級対立」はつづくのであり、その限りでは、民主主義はきわめて不安定であり、とりわけドイツでは、プロレタリアートの「階級闘争」の勝利と「民主主義の進展」とは、切り離されぬものとしてとらえられている。従ってカウツキーにとつては「民主主義」にのみ「将来」を託すわけにはいかなるのであり、ベルンシュタインの見方は「重大な見落し」をしていることになる。

当面の戦術についてはどうであらうか。まずベルンシュタインがかかげるポリシーとの関連では、「ベルンシュタインは我々に協同組合制度やいわゆる自治体社会主義の意義を示している。もとよりこれらの方面において、プロレタリアートの階級闘争のた

めの主要な仕事はなされ得ようし、またなされねばならぬことは、疑いをもたない。」(傍点—筆者)「これに關しては、全然見解の相違などないのである。この相違は、これらの領域の一つ一つにおいてプロレタリアートの解放闘争のために働きうるところの限界を確定することが問題になる場合に初めておこってくるのである。」とのべる。従つてカウツキーにとつて重要なのは当面の改良活動自体の当否ではなくて、「その限界」をあきらかにすることなのである。それでは、ベルンシュタインの「戦術」はどのような点で「限界」を逸脱していると考えられるのか。さらにつけてカウツキーは以下のようにいう。「経済が好景気と恐慌の間を變化していると同じく、我々は政治においても、大闘争の時代、政治的領域における急速な進展—政治革命の時代—が、経済的組織の發展すなわち社会改革が正面にあらわれる政治的沈滞の時と入れかわるのを知っている。」²⁸⁾そして現在は「好景気」「政治的沈滞」の時期とカウツキーも考えており、次のように述べる。

「一八五〇年の環境がヨーロッパ大陸におけるあらゆる労働運動の解体を意味していたとすれば、一八九九年のそれはもっぱら経済闘争が前面に立ち、労働大衆は政治的活動によるよりも、労

働組合及び協同組合の組織によってより多く見込めることが出来るといふ見込みを立てている⁽³⁰⁾とみなし、ベルンシュタインの主張「實際上の経済的小活動の強調」「政治的大変動への疑い」——はこのような現実に対応していると考え、ベルンシュタインの「提案」のある面での妥当性をみとめている。しかし、ここにまたベルンシュタインの「致命傷」があるとされる。彼は、ベルンシュタイン提案は「好景気が永久につづくものとして」たてられたものであるとして、こういう。「この目前の政治的及び経済的状态を社会の正常な状態だと説明し、この政治的沈滞をば遅々たるものではあるが確実に民主主義、社会改革の道を歩んでいるものと説明し、今日の前代未聞の好景気をば無限につづくものと考え、こうして国家と社会の発行程についての考え方において、一つの楽観論に到達する。しかしこの楽観論はまさに「政治的沈滞」と「経済的好景気」が終るやいなや根元からくずれおらねばならぬ⁽³¹⁾」のであり、「戦術論」としてベルンシュタインの「提案」は受け入れがたく、さらに一八九九年を、傾向として政治的沈滞の時期であつても、当時のドイツの政治状況を熟視するなら、決して「楽観的」になりえぬと考える⁽³²⁾。そしてカウツキーは、SPDの戦術についての原則を以下のようにのべる。「それ（SPDの戦

術）はどのような思いがけぬ事に対しても用意があり、決して一本調子の発展に頼つてはいない。恐慌も好況も、反動も革命も、カタストロフエも、ゆっくりとおだやかな発展もともに考慮している。こういう適応力のうちに、社会民主党はその生命力の大部分をもつのである。社会民主党は、その個々の状態に核一的な戦術をあてはめることによって、すなわち、その戦術をカタストロフエに限定することによって、もしくは時を問はず平和的小事業にそれ限定することによって自らに損失を与える理由をなんらもつていないのである。恐慌やカタストロフエや革命を原則上無視する戦術も、またそれらに凝り固まる戦術も、社会民主党の役には立たない。社会民主党はあらゆる状態を利用するものであつて、前にて自ら両手を縛るようなことはしない⁽³³⁾。きわめて「両義的」で「状況主義的」な戦術観であるが、⁽³⁴⁾とにかく当面とるべき戦術・政策に関しては、ベルンシュタインの「提案」とはさほどの相違がなく、これは同じ頃にのべられた「農業綱領」や「プロシヤ邦議会選挙」への態度と照合するものであり、それらは、カウツキーの当面する戦術・政策の具体化と考えられる。そして一方言葉の上では、例のごとく「我々は『綱領』においても『戦術』においてもなんの修正も必要としない」ということにならう。従つて

党の性格も、ベルンシュタインのいうごとく「民主主義的改良党」に変名する必要はなく「闘うプロレタリアートの党」でありつづけなくてはならぬのである。またこの党の性格は、「闘うプロレタリアートを啓蒙し、教育し、組織化し、彼等の政治的勢力をあらゆる現存する手段によって拡大し、かちとることが問題となつてゐるあらゆる部所を獲得しようとする」ことであり、さらに「最終的に政治権力を獲得し、ブルジョア支配をくつがえす立場にプロレタリアートをおく力とわざを彼等に与えようとする」ものなのである。そしてこの性格は「また、共通の敵をたおすためのブルジョア民主主義派との提携は否定しない」⁽³⁵⁾ものであった。この点からみればカウツキーの「邦議会議選挙参加」や「民主主義や社会改良の闘争の肯定」の理由がよくわかるのである。そして「闘うプロレタリアートの党」の見通しは、「ドイツ社会民主党の選挙成績をべつとする時、悲観的な見方をする根拠は全然ないのである。三十年のうちに全くの無力から国内の最強力の党になり、その勢力範囲が既に一國の四分の三を包容し、さらに益々広がつてゆくところの党、ただ一つの大きな階級によつて支持される必要がある結果として、他のいかなる党にも不可能な団結と統一とを達成し、またその宣伝と組織において、最も力強く、経

済的發展によつてささえられている党—このような党が、支配の地位に達すべき時点を實際上測り得ないような遠くへ置いて考える必要はないのである。三十年の間に最強の党になつたところのものは、あとまた三十年の間に支配的な党となるだろう。恐らくもつと早いだろう」という発言の中に見出しうる。ベルンシュタインの「樂觀論」とはまた別の「樂觀論」である(後述)。またこの主張の中から、党勢をもつぱら「得票数」(帝國議會の)によつて測り、「議會での多数」を「政治権力の獲得」と同一視してゆく「選挙・議會中心」「頭数重視」の立場を読みとることができ⁽³⁷⁾る。

ともあれベルンシュタイン論争は、エルフルト綱領全般にわたつての「再検討」をSPDのリーダーにもとめたものであり、カウツキー自体も彼の「変革理論」全体を再度提示せねばならなかつた。ここでの彼の「対案」の特色をもう一度まとめてみよう。

(一) ベルンシュタインの「エルフルト綱領」の基本認識批判に対し、カウツキーはそれらの現象を「迅速」「強弱」ではなく「傾向」として、また現象を切りはなしてではなく、資本主義社会の全体の関連の中でとらえることを強調し、その結果「工業」

とか「資本制がもつ固有の傾向」が極度に重視された。

(二) さらに、綱領にある「最終目標」「党の性格」も確認された。

(三) しかし、近い未来での経済上の「カタストロフェ」の不可避免を否定することにより、二方面では「資本主義体制」のおおの存続が想定され、戦術上では持続的な「勢力拡大」が確認された。それは、「日常活動」と「活動組織」の強化・拡大であった。さらに経済上での「カタストロフェ」を肯定できぬ以上、「新しい社会をつくる直接の力」は人的なもの、つまり「プロレタリアート」にもとめられてくる。またそうならざるをえない。

四) しかし「持続的勢力拡大」の内容は、今までのSPDの戦術、つまり選挙闘争を中心にした「合法的・平和的」戦術であり、「社会改良」のための活動であった。また「民主主義の進展」の必要性も、ドイツでの限界を指摘しつつも、理論の上ではみとめられた。従って「現在何をするか」に関しては、カウツキーも、ベルンシュタインもまた党執行部にも相違はなかった。

(四) 相違は「今後の見通し」にあるのであり、その相違は、社会状況及び運動主体への相互の逆評価にもついているといえる。ベルンシュタインが「状勢」に対しては「平和的發展」という「楽観的」見通し、他方「主体」に対して利害・意識面での

「雑種」性の強調という「悲観」論を、これに対しカウツキーは「状勢」に対しては「矛盾存続の不可避免」という「悲観論」を、主体に対しては「変革遂行能力保持の確認」という「楽観論」を打出しているのである。しかし両者の評価とも、対象に対して「過大評価」「過小評価」に陥り込んだ「楽観論」「悲観論」であったといえる。

(六) カウツキーはたしかに「状勢」判断を行い、それを基礎に「戦術」「党の立場」を規定した。しかしこの判断自体きわめて「一般的」「原則的」であり、ドイツの現状及び近い将来の社会の見通しに関してはきわめて不明確であり、ベルンシュタインへの反論においても説得力をよわめているし、さらに大衆に先んじ、状況に先んじる「指導理論」として、きわめて十分といわざるをえない。しかも、「当面の戦術」に関してはベルンシュタインと一致して、他方この「戦術」に「限定」を置く役割たる「状勢判断」が有効性をかくということとは、事実上は「今ある戦術」を放任しておくことを意味する。

(七) さらにカウツキーにとつての「新しい社会」を開く直接の主体たるプロレタリアへの認識のあまさが、指摘されねばならない。確かに、プロレタリアートの「動向」の中から「未来の社

会をつくる能力と意欲」をできるだけみつけ出すことは、重要であろう。しかし、それは実際の「プロレタリアート」の一側面であることを忘れるならば、はなはだしい「希望的観測」にならざるをえない。しかし事実上は、このような考慮や、また好況期においての「平和的・合法的」「社会改良的」戦術の推進及びその成果が「プロレタリアート」の「生活」や「政治的態度」に与える影響についての考慮は、彼にとって思いもよらなかった。そして現にドイツでは、カウツキーが「望んだ」ように都市の工業プロレタリアートは増大し、党組織、労働組合組織、党の得票数は拡大した。つまり量的には勢力はふくれ上った。しかしその実質は、カウツキーの予想を裏切るものであった。「プロレタリアート評価」の誤りはまさにカウツキーの「変革理論」を根元からゆすぶる性質のものであった。

以上のように、「エルフルト綱領」の維持の「根拠」を全面的に提示したけれども、それは非常に重大な「欠陥」を含んだものであった。きわめて要約していえば、ここでのカウツキーの態度は戦術面での「平和的・合法的」活動、「民主主義的・社会改良的」政策の広まりを容認しつつ、「原則論」からの「わく」をはめようとしたことである。しかしこの当面の活動、政策が、「社

会革命」いや「新しい社会」をつくることといかに結びついているか、またいかに結びつけてゆくかは、きわめて不十分にしか考えられていない。したがって、別の主張によって「エルフルト綱領」を維持しベルンシュタインの「提案」を批判し、当面の「戦術論」を提出しうる可能性も考えられるのである。ローザ・ルクセンブルグの対応をこのような面から考えてみることにする。それによってカウツキーの主張の特色と問題点がよりはっきりと浮び上ってくるであろう。

第三節 ローザ・ルクセンブルグの対応

ここでは彼女の対応の特色を一九〇〇年に出された「社会改良か革命か」を通して考えてみたい。

彼女はエルフルト綱領の第一部分の正しさをはっきりと認め、「社会主義」への移行の不可避を承認するのであるが、その基礎は三つのもの——「資本主義の死滅を不可避にする資本主義経済の増大する無政府性」「未来の社会制度の実際の萌芽たる生産過程の社会化」「せまりくる革命の積極的要因をなす成長しつつある組織と階級意識」³⁸——にもとめられる。これを政治と経済のむすびつきの中でみれば、「生産過程はますます社会化され、生産過程にたいする国家の干渉ないし統制は益々拡大される。しかし同

時に私的所有は益々他人の労働の赤裸々な資本主義的搾取の形態をとり、また国家の統制はますます排他的な階級利益によって滲透される。「資本主義社会の生産関係が社会主義的なものにちかづけば近づくほど、資本主義社会の政治的、また法的な諸関係は、その反対に、資本主義社会と社会主義社会のあいだにますます高い障壁をきざりあげる。」そして「この障壁は社会改良や民主主義の発展によってつき破られるものでなく、逆に、しつかりした不動のものにされてしまう」という考え方に立って、彼女は、「社会改良」や「民主主義」の「限界」を指摘するとともに、「この障壁」は「ただ革命の鉄槌によってのみ、すなわちプロレタリアートによる政治権力の奪取によってのみ破壊される」と断言し、「革命」の不可避を明らかにする。そして、これはまさに現在のドイツの政治状況の中にはつきりとよみとられると考える。すなわち彼女にいわせれば、ドイツの当面の政治の中核的要因は、「世界政策」と「労働運動」の二つである。「抑圧」も「反抗」も「軍国主義」も「民主主義」もすべてこの二つに収斂されていると考える。「世界政策」は「反革命」と「矛盾した資本主義のあらわれ」であり、「労働運動」は「政治革命と社会主義の方向のあらわれである」ととらえられ、SPDのとるべき、そして押進めるべき道はあきらかになる。そして「日常闘争」と「革命」との関

連を以下のように考える。「社会改良のための日常闘争、現在の体制のうえでの労働者大衆の状態改善や民主的諸制度のための日常闘争は、社会民主党にとって、かえってプロレタリアートの階級闘争を導き、政治権力の奪取と賃金制度の廃絶という終局の目的にむかつて努力するための唯一の道をなす。社会改良のための闘争は社会民主党の手段であり、社会革命はその目的である。」このように両者は「目的」と「手段」という形で不可分な結びつきをなすとされる。そして現体制内での「社会改良」「民主主義」自体は「資本の利益」に奉仕せざるをえないのであって、SPDがこれらに「目的価値」をおくことは重大な「誤り」であり、味方の弱化に加担することになると考える。⁽⁴³⁾

当時カウツキーとルクセンブルグは「当面の敵」への中心的な防御者として存在し、それらの「主張」の中にある「相違」はほとんど意識されなかつたけれども、ここでの「相違」は「状況認識」の面できわめて重要な意味をもっているように思われる。

まず第一に、両者ともベルンシュタインの「政治革命不用論」を批判し、「階級対立の激化→政治革命」という見通しを提示した。しかしカウツキーのそれは、「革命」の「不可避」を具体的になぞしせまつたものとして示したのでなく、「原則論」の立場から一般的に指摘した傾きがつよく、これに対してルクセンブルグ

は、当時のドイツをめぐる具体的な政治・経済状況から、「政治革命」の「不可避性」を近い未来のものとして提示したのである。同じ「革命の不可避性」の指摘であっても、その「具体性」「見通し」での相違は、その後の「戦術」論、具体的事件への対処での相違を様々な形で生み出してゆくのは必至である。第二は「社会改良」に対する意義づけである。ルクセンブルグの場合、「社会改良」それ自体の意義を否定し、もっぱら「革命」への組織化の手段として評価した。しかしカウツキーの場合、「手段」という側面もあるけれども、「社会改良」自体に一定の効用をみとめており、現体制の枠内で克服しがたい不十分さ、限界をこえるために「社会革命」の必要性・不可避性をひき出すという側面もあるのである。カウツキーにとつて、「社会改良」は「手段」「目的」両価値の混在としてとらえられる。そしてこの比重の置き方の相違は、SPDの社会改良活動、さらには「改良主義者」への評価において、かなりのくいちがいをもたらすのである。⁽¹⁴⁾

たしかにルクセンブルグの主張は明解で具体的である。しかしそのことは、その主張の有効性を示しうるものでない。ルクセンブルグが現在のドイツ政治の二大要因の一つとしてあげた「労働運動」の高まりは、「社会改良」の努力の積みあげにほかならず、

この積みあげが高まれば高まるほど、その運動のリーダー、参加者自身が「改良」の「成果」に「固執」し、目的として社会改良をもとめることになつていたのであり、ルクセンブルグの主張は「虚像」の上に立っていたといわざるをえない。しかも「社会改良」の努力を「手段」としてみる彼女の主張は、労組リーダーや党員の多くをとらええず、「反撥」をかうことも少くなかつた。⁽¹⁵⁾

しかし三人とも、そしてとくに、奇しくも意義づけは逆であるけれども、ベルンシュタイン、ルクセンブルグのいずれも「日常闘争」を強調することにはかわりがなく、SPDの日々のあらゆる部門に広がった活動はなんら妨げられることはなかつたのである。

一八九八年から一九〇三年まで、党大会を中心に、ベルンシュタインの「提案」をめぐって論争がつづけられ、一八九九年、一九〇二年、一九〇三年には、ベルンシュタインの主張への批難決議が可決されたが、他方彼は自己批判も行わず、除名もされず、一九〇二年、十四年ぶりに帰国し、プレスラウ市から帝国議会議員にえらばれた。また党の日常活動もなんら変更されることはなかつた。つまり選挙闘争を中心においた「平和的・合法的」戦術で「民主主義的・社会改良的」政策を深めつづけてゆく活動が行

われたのである。一八九九年の党大会の決議は、以下のようにのべている。⁽¹⁸⁾

「今までのブルジョア社会は、党にその社会についての根本思想を放棄したり、変えたりする変化を与えなかった。党は階級闘争の場に依然として立っている。それゆえ党固有の事業は労働者階級の解放であり、したがって政治的権力を奪取し、その助けをもって生産手段の社会化及び社会主義的生産、交換様式の導入を行い、すべてのものの最大限の福祉を実現することを、プロレタリアートの歴史的な課題と考える。この目標を達成するために、この根本思想と結びつき、党に成功を保障するすべての手段を利用する。現存国家や社会秩序の代弁者や擁護者としてのブルジョア党の本質や性格をとりちがえることのない場合、選挙における党の強化、人民の自由、労働者階級の社会状態の熱心な改良、文化的課題の増進、さらに労働者、人民への敵対的な試みが問題となった場合、ブルジョア党との場合、場合にとられる共同行動を党は拒否しないし、この行動においてはどこでも党はその十分な自主性と独立性を確保し、それをただ終局目標への一步としてのみ考える。(中略)⁽¹⁹⁾これによって、党はその根本命題や基本要

求、その戦術、その名前をかえる(社会民主党を民主社会主義改

良党に)なんの理由ももたない。そして現存国家や社会秩序やブルジョア党に対抗するSPDの立場をおおいかくしたり、混乱させたりする試みを、きっぱり拒否する。」

一方で「原則」を確認しつつも、「社会改良と民主主義の進展」のための日常活動を「手段」として以上に強調しており、「フォルマル、ユンゲン論争」での決議との類似を示すが、「改良活動」の具体的指摘、強調は一層つよまっており、党の政策・組織両面での影響力拡大現象との結びつきを感じさせる。この「決議案」に表わされた「対応方式」は、またカウツキーのそれと基本線において一致しているのである。

(1) 従ってここでまず問題になるのは「エルフェルト綱領」の「第一部分」への評価であり、SPDの当面の戦術論であって、マルクス、エンゲルスの理論がいかにとらえられ、修正もしくは擁護されたかではない。

(2) Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie, SS. 6~7. 邦訳 世界大思想全集(戸原訳)五~六頁、個々の現象については Drittes Kapitel, SS. 72~108. (邦訳 五九~一〇六頁)

(3) *ibid.* S. 7. (邦訳 六頁)

(4) *ibid.* S. 7. (邦訳 六頁)

(5) *ibid.* SS. 133~138. (邦訳 一一〇~一一四頁)

- (6) *ibid.* SS. 139~142. (邦訳 一一五~一一七頁)
- (7) *ibid.* S. 9. (邦訳 八頁)
- (8) *ibid.* S. 256. (邦訳 二二三頁)
- (9) *ibid.* SS. 174~184. (邦訳 一四三~一五三頁)
- ベルンシュタインの場合「民主主義の徹底」がきわめて重視される。彼による「民主主義」概念の核は「社会の全成員同権という法的概念」(S. 175)であり、これは「たとえなお階級の事実上の止揚ではないにしても、原理的には階級支配の止揚」(S. 180)であって、「社会主義を闘いとする手段であり、また社会主義実現の形態でもある」(S. 180)ということになり、「当面の運動」は「民主主義の進展」にまとめられる。
- 市民社会については、「社会民主党はこの社会を解体して、その成員の全部をプロレタリア化しようとするのではなく、むしろ労働者をプロレタリアという社会的地位から市民という社会的地位に引上げ、そうして「市民」もしくは「市民的存在」を一般化することに絶えず努力している。社会民主党は市民社会のかわりにプロレタリア社会をおこうとするのではなく、資本主義的社会秩序のかわりに、社会主義的社會秩序をおこうとするのである。」(S. 183. 邦訳 一五二~一五三頁)また「自由主義」(Liberalismus)については確かに「この名をつけた政党」とは「敵対的」であるが、「世界的な運動としての自由主義に關していえ

ば、社会主義は単に時間の順序からだけでなく、その精神的內容からしても、自由主義の正統な相続人」(S. 184. 邦訳 一五三~一五四頁)であるとす。

- (10) *ibid.* SS. 214~233. (邦訳 一六四~一九二頁)

(11) 当時党内で「ミリタリズム」の評価をめぐってくいちがいがあり、「ミリタリズムの強化」が対外的には「侵略と戦争の危機をたかめ」「対内的には抑圧機関の強化」であるということ、欠落させ、「軍隊の祖国防衛」の側面を評価し、「ミリタリズム」への批判を「人民への負担の増大」に限定する少数派(代議員レベル)がいた。ベルンシュタインの主張はこの「少数派」を支えるものだった。「ミリタリズム(とくに艦隊政策)」とSPDについては、大野前掲書二三七頁~二四五頁、広田前掲書六七~七五頁

- (12) *Voraussetzungen.* SS. 215~219.

ベルンシュタインからみれば、カウツキーの「農業綱領」は「ブルジョア民主主義の諸要求の農業諸関係への適用にすぎず、それが農村労働者に対する保護規定の拡張によって強化されているにすぎない。これが私(ベルンシュタイン)の目から非難すべきこととしてうつるはずがない」といえるほど評価できるのである。(ibid. S. 217. 邦訳 一七九頁)

- (13) 彼はこの例として「暴力(Gewalt)による政治」をこよ

- く否定したベーベル演説、カウツキーの「農業政策」の諸原理、プランデンブルグの自治体綱領など、二〇近頃のSPDにあらわれた最近(九〇年代末)の現象を羅列してゐる。(ibid., SS. 232~233. 邦訳一九一~一九二頁)
- (14) ibid., S. 230. (邦訳一九〇頁)
- (15) カウツキー自身は、ヘルンシュタインとは、個人的にも理論的にも極めて近い関係にあった。「エルフルト綱領」は二人の合作であつたし、ヘルンシュタインは Neue Zeit の英国通信員の役割も果していた。そして英国でヘルンシュタインが徐々に「社会民主党の原則」の立場から離れてつゝあつた時でも、カウツキーのヘルンシュタイン評は高かつた。しかしヘルンシュタインの「主張」の全貌が明らかになり、批判がマルクス、エンゲルスの全理論、さらにはカウツキーにも及ぶにつれて、次第に理論的にも個人的にも対立を深めた。理論面では党大会「Neue Zeit からは「著書」という形でカウツキーはヘルンシュタインを批判し、個人的には「忠告と説得」から「専任通信員の解任」(一九九年)、絶交(一九〇一年)へとすすむ。
- イ) K. Kautsky 「Meine Lebenswerk」, S. 17, S. 28.
- Adlers Briefwechsel mit August Bebel und K. K. S. 152, S. 245. ㊦) ibid., S. 221.
- ㊧) ibid., SS. 273~274, ㊨) Peter-Gay, 「Dilemma of Democratic Socialism」 P. 80, Adlers Briefwechsel.
- S. 355.
- カウツキーの「ヘルンシュタイン」批判で重要なのは、Bernstein und das Sozialdemokratische Programm (1899), N.Z. Jg. 18. Bd 1 「Zum Parteitag von Hannover」 「Der Parteitag von Hannover」 N.Z. Jg. 18. Bd 2. 「Die kommenden Kongresse」
- (16) Bernstein und das Sozialdemokratische Programm, SS. 49~79. 邦訳「マルキシズム修正の駁論」世界大思想全集四七(春秋社版)山川訳 七七~一二六頁、とくに全産業に關しては ibid., S. 60. (邦訳九四頁)中・小商業については ibid., S. 64. (邦訳一〇二頁)「農業については ibid., S. 78. (邦訳一二四~一二五頁)が要点。
- (17) ibid., S. 127. (邦訳一九五~一九六頁)
- (18) ibid., SS. 135~152. (邦訳二〇七~二三三頁)
- (19) ibid., S. 48. (邦訳七六頁)
- (20) カウツキーは「窮乏化」についての説明の仕方には三つの方法があるとす。第一は、「資本家」が「労働者」を益々おし下げ、それに対し「労働者階級」が結束し、反抗するところ、「プロレタリアートの下落」と「プロレタリアートの向上」を示す相対立する傾向と二つのとらえ方であり、(ibid., S. 115. 邦訳一七七頁)第二は「人間の生理的欲望」の「不充足」としての「生理的窮乏化」及び社会的欲望の「不充足」たる「社会的窮乏」の現出としてのとら

え方であり (ibid. S. 116. 邦訳 一七七～一七八頁)、第三は資本主義的工業によって「新に占領された領域」や「その限界領域」での「資本主義の窮乏化」がとくにはげしくなるものとしてのとらえ方 (それは小商工業者、貧農の非常な「窮乏化」として、後進地域での「窮乏化」として現出) である。ibid. SS. 125～126. (邦訳 一九三～一九四頁) そしてこれら三つの「とらえ方」は互いに補合うものとされ、さらに現象的にも結びついており、それを総合して考えると本文引用のような主張となり、「社会変革」の可能性を主張する中核的な根拠となる。

(21) ibid. S. 187. (邦訳 二八〇頁)

(22) ibid. S. 189. (邦訳 二八一～二八二頁)

(23) ibid. S. 189. (邦訳 二八二頁) カウツキーの示すところでは、都市と農村の人口比は八二年と九五年で比較すれば四一・八対五八・二から四九・八三対五〇・一七になり、一〇〇〇人中の工業従事者数は、全国で三五五・一から三九一・二、都市では五〇九・三から五三〇・〇になっている (ibid. S. 189～190. (邦訳 二八二～二八三頁))

(24) ibid. S. 190. (邦訳 二八四頁)

(25) ibid. S. 195. (邦訳 二九〇頁)

(26) この考えは彼の主張の全体に流れるものであるが、とりわけ ibid. SS. 179～181. (邦訳 二六八～二七一頁) に要約されている。

(27) カウツキーにとって民主主義は「一つの支配形態」つまり「多数支配の形態」として考えられる。それは「多数を制する階級、もしくは経済的あるいは知的に多数になっている階級の支配を意味する。」したがって「プロレタリアートの階級支配なしには、階級の撤廃はあり得ない」から、「民主主義」はプロレタリアートに「不可欠」な手段であるが、しかし「階級支配の撤廃」ではないのである。それゆえ「民主主義の進展」と「階級対立」「階級闘争」は並存するものとしてとらえられた。また「階級闘争の無用な尖鋭化を避ける」ために「民主主義」が役立つ理由は、それが「自由」と「諸党並びに諸階級間の勢力関係を明白に見きわめる」効果をもたらすと考えられるからである。従ってカウツキーにとって「階級支配」の撤廃と同時に「民主主義の進展」も「容認」されるのである。いづれかの「否定」もしくは「強調」ではない。(ペルンシュタインヤルクセンブルグのような…) ibid. SS. 170～172. (邦訳 二五六～二五九頁) 「プロシヤ邦議会選挙論争」や「農業綱領」案でのカウツキーの「民主主義」の強調はこのような脈絡でとらえうるのである。

(28) ibid. SS. 160～161. (邦訳 二四四頁)

(29) ibid. S. 163. (邦訳 二四八頁)

(30) ibid. S. 165. (邦訳 二五〇頁)(注二七)・a.a.O (邦訳 同ページ)

- (31) *ibid.*, S. 166. (邦訳二五〇～二五一頁)
- (32) シュトゥットガルト大会で、カウツキはベルンシュタインの「提案」に答えて以下のようにいう。「ベルンシュタインの考えはまさに適切な事実にもとづいている。それはただ一つの欠陥をもつ。そして我々にとって不幸なことだが、この事実はずいぶん見出されるのではなく、英国で見出されるということである。(中略)
- 今ドイツでなにから話すのか、人民の権利の拡大について話すのか、団結権の拡大について語るのか、いや、国家の攻撃について、選挙権の修正、取締りについて話す。これが我々に開かれている立場である。この立場においては、ベルンシュタインが主張した道は考えられぬ。ベルンシュタインがもし我々の中にいたら、彼はこの道(ベルンシュタインのとなえる道—筆者)を批判した一人であったら。C. C. Schröder, *ibid.*, SS. 85～86.
- (33) *ibid.*, S. 166. (邦訳二五一頁)
- (34) 我々は八年前の「エルフルト綱領」についての彼の見解さらには『フォルマル』・『ユンゲン』への反論の中で、これときわめて類似した「表現」を見出す。(前号一・二章参照)
- (35) *N.Z. Jg.* 18. Bd. 1 SS. 11～19.
ここでは彼はSPDのとおり三つの道——①プロレタリアートが未成熟なので「民主主義」がブルジョア諸勢力に
- よって維持され、したがってプロレタリアートはブルジョアを刺激することを避け、「改良活動」に専念すべきである。②「ブルジョア諸党」にかわってSPDが「民主主義」を進展させてゆく。③「ブルジョア支配をくつがえす」闘う「プロレタリアート」の党となる——しめし、第三の道をとらざる」をえないとしている。この根拠は「ブルジョア」勢力の否定面の強調である。(ibid., S. 15)
同様の主張 Bernstein und Sozialdemokratische Programm, SS. 177～178. (邦訳二五六～二六七頁)
- (36) *ibid.*, S. 191. (邦訳二八四～二八五頁)
- (37) リッターは次のようにいっている。「革命の党でありながら革命を行わない党という社会民主党の矛盾した考えは、期待すべき革命の原因とプロレタリアートの役割の問題を無視させた。」(Ritter, *ibid.*, S. 203)
- (38) Sozialreform oder Revolution, S. 3. (邦訳ローザルクセンブルク選集一卷(喜安訳)一六〇頁)
- (39) *ibid.*, SS. 19～20. (邦訳一八八頁)
- (40) *ibid.*, S. 20. (邦訳一八八～一八九頁)
- 彼女のこの主張を別の表現で補ってみるなら、一つは「現在の国家」と「経済上の支配階級」の結びつきの強調であり、それによる「社会改良」の「不毛性」(「プロレタリアート」にとつての)の強調である。「現存の国家は支配階級の機構である。国家は社会発展のため、また全部に共通

した利益のための様々な機能をひきうけたとしても、それはただ、これらの利益と社会発展とが支配階級の利益に一致するからであり、その限りにおいてである。たとえば、労働者保護は全社会の利益であると同じく、階級としての資本家の直接の利益でもある。(ibid. S. 17. 邦訳一八三～一八四頁) 従ってまた「国家のふりまわす社会改良」とは「社会的統制」を、すなわち「自由な労働集団が自身の労働過程に対して統制を實行すること」でなく、資本の階級組織が資本の生産過程にたいして統制を行うこと」(ibid. S. 14. 邦訳一八〇頁)となり、また労働組合の活動も、「賃金闘争と労働時間の短縮の問題に、すなわち、資本主義の収奪を市場関係に依じて抑制することだけに」限定される。「生産過程に対して影響を与えることは、事の性質上、労働組合にはできない」とされる。(ibid. S. 13. 邦訳一七八頁) それについての説明は SS. 12～13. 邦訳一七六～一七八頁にある。これらの考え方は「社会変革」のとらえ方にも投影される。「資本主義的な階級支配の根本的な関係は、ブルジョア的な法律に起因するものでなく、このような法律の形態をとっているものでないから、ブルジョアの基礎の上での法律による改良などに変革することはできない」(ibid. S. 41. 邦訳二二七頁) ことになり、「社会革命」と「法律による改良」との「差」は、「継続の期間」によって区別される要因ではなく、「その

本質によって区別される要因である。」つまりところは「質的变化」(革命)と「量的变化」(法律による改良)との相違となり、ベルンシュタインの「変革観」との違いは明白である。(ibid. S. 39. 邦訳二二四～二二五頁)

(41) ibid. SS. 37～38. (邦訳二二〇～二二三頁)

ルクセンブルグも、現在では社会主義的労働運動こそ「民主主義の唯一の支柱」という考えで、カウツキーの見方(注三五参照)と通じるが「民主主義」それ自体への「評価」は、カウツキーの方がはるかに高い。しかし他方の極に「世界政策」をおき、その中心的な「手段」として「軍国主義」を位置づけたのはきわめて重要な指摘であって、これにくらべれば、カウツキー等の状況判断はきわめて不十分といわざるをえない。四章の注(一四)参照(前号四六六頁)

(42) ibid. S. 1. 邦訳二五八頁 類似の指摘 ibid. S. 49. (邦訳二四二～二四三頁)

(43) したがってベルンシュタインの試みは、SPDにとって一つの「手段」であるものを「目的」に転んじてしまうものだということになる。(ibid. S. 1. S. 48. 邦訳一五五頁、二四〇頁) さらにこのことだけでなく、「合法化」されて以来「公然化してきた」「日和見主義的潮流に理論的根拠を与える初めての試み」であったともされている。

(ca. O.) (邦訳、同ページ)

(44) 先にのべたように、「民主主義」とくに「民主主義的制度」への評価についても同様である。

(45) Ritter, *ibid.*, S. 208. しかし「世紀転換期」のドイツの政治・経済の状況は、必ずしもベルンシュタインやフォルマールの「楽観論」を受入れるものといいがたい側面をもっており、ある偶発的な出来事によってルクセンブルグ等の「革命的言辭」が急激な支持をえることもある。(例えばロシア第一次革命のあとの「大衆スト論争」(一九〇五年)、一九一〇年の「プロシヤ邦議会議選挙権闘争」の高まり)そして党大会の決議及びカウツキーの主張にみられる「革命的言辭」も単に「たてまえ」としてのみ評価できない。

(46) Schröder, *ibid.*, S. 88.

(47) 「略」の部分では、「協同組合」の効用についての「限界」の強調、「軍国主義」反対の確認、「共通した文化的課題の解決をもたらす『インター』の政策」の支持、確認がなされている。

第六章 ま と め

以上私は、主として五つの事象に対するカウツキーの対応をみてきた。その際、「エルフルト綱領」への対応は九〇年代の「変革理論」の原型として、またフォルマル・ユンゲン論争、農業論争、プロシヤ邦議会議選挙権論争はその理論の具体化、活性化

としてとらえられ、さらにベルンシュタイン論争については、このプロセスをへたあとの理論の再構成として考えてみようとしたのである。この対応の中で考えられることは、

(1) マルクス理論の「原則」(原則には資本主義社会の一般的傾向、未来社会の骨格の想定、「革命党」の一般的任務がある)の強調がどの対応の中にもあらわれ、彼の理論展開の集約点をなしているのである。しかし、集約の仕方が具体的現象からそのまま「原則」に結びつけられる傾きがつよく、中間頃、いいかえれば当時のドイツの社会状況、近い未来の見通し、そこでの「革命党」の役割が十分にあきらかにされえないのである。

(2) しかし一方、当面の戦術としては持続的な運動を想定し、日常活動の強調、組織の拡大をめざすことが容認され、選挙闘争、議会や自治体での活動、労働組合運動などいわゆる「合法的・平和的」な戦術での「民主主義及び社会改良」のため活動が強調されているのである。そしてこのような活動は、当時のSPDにおいて益々盛んに、広がり、深まりはじめていたのである。したがってカウツキーの役割は、このSPDのますます広がる活動に「原則」による「わく」をはめることであつたといえるし、これはまた、程度の差こそあれ執行部の対応でもあつたといいう

る。しかしこの「わく」は「現象」と「原則」をつなぐ十分な中間項でうめられない場合には、きわめて不十分なもの（俗にいう「原則論」）になるし、その上「わく」が実際に「はめられた」かどうかは、もはやカウツキー自身でなく、他の黨員がこの「わく」をどれだけうけ入れたかどうかにかかってくるのである。これは、当時の党の理論水準からして、きわめてのぞみうすであり、かついくら理論上の「限定」があっても、「合法的」「社会改良的」な実践活動が可能であり、継続してゆくとするれば、それは根をおろし、理論自体に、さらには実践主体に逆作用し、言葉の上の「限定」を空洞化してゆくものであった。したがってそのような場合、「原則上」からの「限定」をもつともらしくのべることは「実践活動」をならんチエックしていることにはならず、かえって事態のままの姿をあいまいにしてみましょう。カウツキーの対応はこの可能性を多分に含んだものであったといえよう。

しかし九〇年代の後半において、カウツキーの対応の中には、「原則論」的対応をこえるような対応の仕方があらわれてきていることも見落せない。つまり中間項がみだされはじめてきているのである。我々はそれを、プロシヤ邦議会をめぐる論争の中でみた。そしてその中間項の特色は、当時のドイツの政治勢力の動

きをとらえ、それとの関連でSPDの戦術を立案してゆくものであった。しかしそこでの政策は、フォルマール、ベルンシュタイン等の主張と一致しうるものであった。単に「原則」によって「現」に行われている戦術」をカムフラージュする以上に、それ（戦術）を積極的に根拠づける状況判断を提示しはじめていたといえよう。理論的「硬直化」ではなく、まさに活性化、具体化の動きも生じていたのである。しかしこの状況判断自体、なお重要な点において不明確さをのこしていた。一つは「現」にある戦術」の限界性及び「民主主義の進展」の可能性についてであった。

これら二つは相互に関連しており、SPDにとっての当面の「状況認識」の中核点であった。たしかに、この要因は「流動的」「多様性」を含んだもので、ルクセンブルグのように明快に断定することは妥当とはいえぬが、しかし曖昧にされたままであったり、問題ごとに評価が変わることは、「指導理論」としてはきわめて「不十分なもの」といえよう。

我々は九〇年代のカウツキーの対応全体を考えた時、いずれにしても当時のSPDの行っている活動形態を容認していること、そして後半の対応の方がより「容認」の度合が高まっていること

と、さらに「指導理論」としてはきわめて重大な欠陥をもっていることが結論として提示できよう。

そしてこの結論のもつ意義は、当時のSPDの全体の動きをながめた時、より明確に理解できる。世紀末のSPDはその勢力を拡大、いいかえれば日常活動の幅と深さをまし、組織をめざましく拡大していった。したがって、「指導理論」上の中心的な課題は、この「拡大」をSPDの立場（綱領の第一部分の立場）からいかに評価し、「一層の拡大」のためにいかなる戦術が妥当かを決定するという、きわめて「創造的」で「実政策的」な作業であった。そのためには「原則」把握とともに、状況に対する「具体的」かつ「リアル」な認識をもち、状況に能動的に対処する姿勢が不可欠であった。しかしこの状況にあって、トップリーダーの多くはSPDの「広まり」を容認し、主にそれに「原則」のわくをはめることに終始していた事實は、その後のSPDの「歩んだ道」を考えた時見落しえないものである。

しかし「指導理論」が「不明確」「不適切」であっても、また分裂していても、「実際活動」は「理論」とは無関係にどんどん既成事実をつみあげ、それ自身の根をはってゆく。そして「理論」は「事実」の追認、正当化の役目を負されてくる。我々は一九〇

〇年以降リーダー層の「対応」の中に、「受動的」かつ「活動の正当化」たる特質をもったものをきわめて多く見出す。「この特質」がSPDの「指導理論」の中心線だったといっても過言ではない。そしてSPDの基本的な「進行方向」は九〇年代末にすでに「社会改良」政党の方向へ、「体制内在化」の方向へと大きく傾いており、リーダーの「政治指導」も事実上この「傾向」を容認もしくは推進しこそすれ、その逆のもでなかったのである。⁽¹⁾

(1) リッターは一九〇〇年までにSPDは「本気で考えられない革命の言辞をもった実際政策を追求する労働者党になりかわっていた」とみており、このような党の性格を決定づけていたのは「理論的概念」や「修正主義の学者」ではなく「改良活動の拡大」「実践活動家」（労働組合のリーダー、労働者書記、自治体政治家、邦議会議員）であったとのべら。Ritter, *ibid.*, S. 186, S. 208.)